

# 現代青少年の文化と意識（3）友人関係の変容

中央大学 辻 泉

## 1. 目的

本報告の目的は、主として2002年及び2012年に行われた実証的な質問紙調査の結果に基づき、若者たちの友人関係の実態およびその変容について考察することである。継続的に行われている他の質問紙調査の結果を見ても、若者たちの日常生活において、友人関係の持つ比重がますます大きくなってきていることは明らかである。

例えば、世界青年意識調査の結果によれば、「充実している」と感じるときについて、「友人や仲間といるとき」と答えたものはほぼ一貫して増加傾向にあり、2007年の第8回調査でも74.6%と最も割合が多く、他の五カ国と比較しても、最も高い数値であった（内閣府政策統括官2009）。

ほぼ同様の項目は今回の我々の調査でも尋ねているが、「友人や仲間といるとき」と答えたものは81.0%と、やはり最も多くなっていた。その一方で、「他人にわずらわされず、ひとりでいるとき」と答えたものも37.0%おり、同じ項目については、世界青年意識調査においても近年増加傾向が見られるという点が興味深い。つまり、かなり多くの若者たちが友人関係に充実感を感じるようになってきている一方で、それと同時に煩わしさをも覚えるようになりつつあるのである。

このように今日の若者たちの友人関係は、容易には理解しがたい複雑な様相を見せている。そこで本報告では、これまでの先行研究（希薄化説、選択化説、同質化説など）を改めて振り返りつつ、さらに実証的な質問紙調査の結果と解釈に基づいて、その実態及び変容を明らかにしていく。

## 2. 分析方法

調査全体の概要については、本部会の第一報告の通りであるので、ここでは本報告に関連する部分のみを記しておく。本報告が主に用いるのは、回答者自身の友人関係に関する質問項目である。具体的には、「親友（性別の人数も含む）」「仲のよい友だち」「知り合い程度の友だち」の人数を把握する項目や、「親友について感じること（「主観的意味」「社会化機能）」、「親友」「仲のよい友だち」と知り合った場所、友人形成で役立ったメディア、友人全般とのつき合い方およびそこで感じたことなどである。

## 3. 結果

社会背景として、高校時代の部活動非加入者の割合が増加している一方で、新しいメディアが友人形成に役立ったという割合は増加していた。そうした中で友人数については、どの親しさの段階においても増加傾向がみられた。

しかしその一方で、友人と出会う場所の多様性であったり、友人の属性あるいは「主観的意味」「社会化機能」などについては、ほとんど変化が見られず、人数が増加しているにもかかわらず、決して異質な相手との関係が増加しているわけではないということがうかがえた。よって全体的な傾向からすれば、おおむね類似の調査結果と同様に、友人の人数は増加しているものの比較的同質性の高い特徴が見られたと言えるだろう。

<主要参考文献>

内閣府政策統括官，2009，「第8回世界青年意識調査」  
(<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html>)